

風の末裔シリーズ・1stシーズンの7

～カタカゴ～



「水疱瘡ですねえ…」

熱に喘いで横たわる子供のをとって、そのヒトは家人を振り向いて言った。

「お祈りより、熱冷ましですね。果汁と薬湯を与え、湯冷ましをたっぷり飲ませて。一応うつりますから注意を…ああ、でも幼子がいたら、この際一緒に済ませて置けばいいですよ」

一通りの説明を済ませ外に出ると、そのヒトはもういなくなつた。そのヒトを呼んだ祈禱師だけが、平伏している。家人も習つて、その方向に頭を下げた

「まったく、人間がもう少しまとまってる頃には、水疱瘡くらいで呼ばれたりしなかつた物ですがねえ…」

蒼の長は草の馬で空を駆けながら、小さくなる人間の集落を振り向いた。それでもたまに、本当に恐ろしい呪いや憑き物にいくわす事もあるので、人間の求めも無下に出来ない。

妖精は：取り分け、蒼の長の血筋は、人間の数倍長命だ。その分、完成された知識を受け継ぐ。それを使用するのは長命な者の摂理だろう。人助けとか、役立てるわけではない。

…摂理なのだ。

その信念の元に、長は代々風の末裔を率いる。

「今日はここまででしょうかねえ」

本当はこんな細かい呼び出しは自分でなくともよいのだ。しかし、丁度、世代の変わり目で、同世代の能力者が極端にない。おまけに先代の長が偉大過ぎて、後進が萎縮して育たなかつた。着いて行けたのは自分だけだつた。

おかげで、今の長は、近年稀に見る多忙な長になつてしまつてた。

「あの子を行かせてしまいましたからねえ…」

もっとも彼に近しい血を持つ妹がいたのだが、強く求めるものがあつた、里を飛び出してしまつた。自分が許したのだから、彼女を責める気はないが、こうも忙しいと、愚痴つてみたくもなる。

長らく修練所の教官を務めあげた、オタネ婆さんという優秀な補佐が、いる事はいる。だが彼女は、今は由ゆえあつて、別の用事に掛かりきりだ。

先月、草原のはずれに、十数年音沙汰のなかつた妹の馬が現れた。背には妹ではなく、人間の娘が乗っていたが、これが酷く弱つていて、おまけに身重だつた。

蒼の里で保護して看病しているのだが、容態は芳しくなく、オタネ婆さんはそちらに付ききりなのだつた。

草原の真ん中の、結界に護られた蒼の里に降り立ち、既に馬を預けた。

空色の髪の子供が数人、背の高い長を目ざとく見つけて、わざわざちゃんと駆け寄って来た。

「長さま、長さま、先日の試験で約束通り一番を取りました！僕、早く名前が欲しいです」

「今度、沼地の蟲を退治に行くの、僕も行っていますよね！兵長が長さまに許可を貰って！」

「ああ、よくやりましたね、でも名前はまだ先ですよ。あと百回は一番を取って下さい。ミルワーム退治に…?! 馬鹿言っちゃいけません。勇敢なのは結構ですが、自分の力量を…」

そんな話、なんで兵長の所で止めて置けなかったのだ？分かっていて…。前の長が何にでも完璧な判断が出来たので、みんな、長に頼る習慣が抜けていないのだ。

「おささま、おささま…」

こんな小さな者まで、なんの用事が…？ うんざりしてこちらを向くと、鼻先に薄ピンクの花を突き付けられた。

「今年一番のカタカゴの花が咲いたの。おささまに見てイタタキたくて」

「あ…ああ……」

幼い手に握られた小さな花を受け取り、多少穏やかな気持ちになった。

「あ——！ するい！ それなら僕、今年一番のゲジゲジを…」

「僕、カマキリのタマ」を…」

長は群がる子供達を何とか振り切って、里の奥に向かった。居住区から離れたヒト気の無い場所に、ひっそりと設えられた、小さなバオ。

淡い明かり採りの下で、その女性(ヒト)はベッドに半身を起こしていた。オタネ婆さんは何の用事かはずしているようだ。

「今日は起きていられるのですか？」

「はい、子供達の可愛らしい声がしました。慕われていらっやいますのね…」

女性の声は薄暗い中で、鈴を振るつようだった。

「特に機嫌をとっている訳でもないのに、何でなんでしょうね？」

「子供ってそういうの、分かるんですわ。自分を子供扱いしない人を、信用するんです」

最初に比べたら随分喋ってくれるようになった。初めは、何を聞いてもタンマリだった。

「ではこちらの聞く事には何も答えてくれなくて結構。貴方の話したい事を話してください。特に妹に關して」

そういう言い方をしてみたら、ポツポツと断片的な事柄を喋ってくれた。

「乗馬スボン……」

「は……？ 乗馬スボン……ですか？」

「はい、妹君が私の為ために縫ぬいってくださいました。私が馬に乗った事がないと言つと、教えてあげると言つてくださつて。本当にお優しい方で……」

「裁縫を……？ ここにいた頃は、そんな事、一度も……」

「縫ぬいい物は特にお好きなようでしたよ。自分の為ためより、人の物を縫ぬいうのが……」

少しでも周りの状況が見える話になると、彼女は睨にらみ話はなを切つた。

「あの乗馬スボン、履はかないうちにお別れしてしまつた。一度くらい履はきたかつたわ」

「どんな乗馬スボンだつたんです」

「空色の……彼女の髪と目の色にびつたりだと、ある方に頂いた絹を、私に使つかつてくださったのです。私なんか……」

核心に触れずとも、そうした言葉の端々に、妹がああの王君に

そこそこ大切にされているのが垣間見られて、長は彼女と雑談するのが好きになつた。

「あ……カタカゴ……」

言われて長は、手の中の花を思い出した。枕元の小さな皿に水を張り、花卉を浮かべる。

「私、この花、一番好き。春が来るつて教えてくれるの」

女性は嬉しそつに淡い薄うすピンクを見つめる。

「では、カタカゴにしましょう」

「……は……？」

「貴方は名前を覚えてくれる気がないし、カタカゴで良いですよ。不便だし」

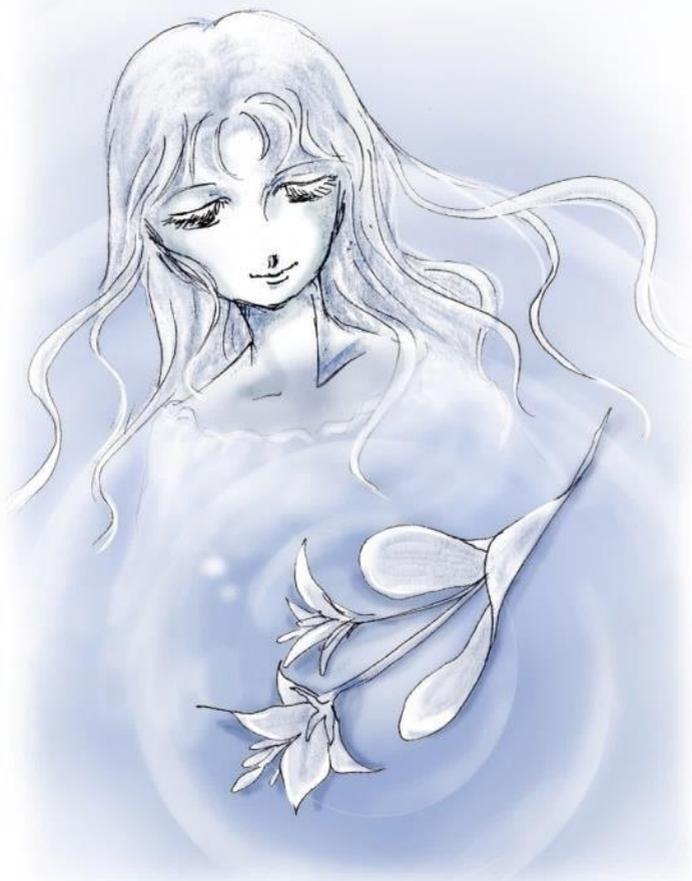
「…………」

「一応、祝福しましょうか？」

その頃、山沿いの沼地に、巨大な蟲が異常繁殖していた。

何処まで自然に任せて、何処から手を出すべきなのか、判断するのも蒼の長の役目だ。

人間だつたら、害を成すモノは排除……で、済ませる。本当はもっと大きな広い目で見ろべきなのだ。



昨日から渋々降っていた雨が本降りになり、空が暗くなる夕方。沼の周囲に住まう者の話を聞きに行った兵士が帰って来た。

「一番古く生きている翁(おじい)も初めて見る繁殖ぶりだぞうです。平常なら成虫は二、三匹しかいないのに、今は数十匹。しかも倍の大きさです」

厩横の詰め所で、兵士はブルッと震えて、馬の雨養生あまよ(あまよ)う(う)じょう(じょう)を外しながら報告した。

「不自然ですね。何か別の意味があるのでしょうか？ 雨続きで水位が上がっているのも関係しているのかも…」

「長様!!」

慌だ(わ)だ(わ)しく飛び込んで来たのは、オタネ婆さんの後任の、修練所の若い教官だった。

「どうしました?!

教官の後ろから、まだ馬に乗る年でない女の子が、半泣きで着いて来た。

「オトコノコ達が、ムシの沼に行くんだって、勝手にお馬に乗って出掛けて、帰って来ないの!」

「な、なんですって?! なんでまた!!」

「先月馬に乗り始めたばかりの子供達です。気の大きくなる年頃(ころ)で…」

「解説は要りません!!」

長は雨衣をはおって、外に飛び出した。

「鬪(と)牙(が)の馬を引け! あと、手練れの兵士を何人か! 私は先に行きます!!」

訓練された兵士達は即座に集まった。

一足先に飛び立つとうとする長に、教官が、私も行くべきでしょうか? と尋ねる。

当然でしょう! オタネさんなら聞くまでもなく…と喉まで出掛かるのを呑み込み、お願いしますと叫んで飛び立つ。

雨脚は強くなり、普通の草の馬の脚力は宛(あ)て(あ)てにならない。

鬪(と)牙(が)の馬は雨を突いて一騎、全力で飛んだ。沼の畔に近寄る頃には辺りは真っ暗で、どうどうという水の音だけが渦巻いている。

闇の中、馬を空中で停止し、長はゆっく(ゆ)っく(ゆ)り両手を回して印を切った。

——蒼(あ)の一族の血を持つ者……!!——

——血に恋えよ……!!——

肩間に反応がよぎる。

「あちらか……」

草の馬を向けた方向は、確か中洲があった筈だ。暗闇の中、長の眼は、同じ血を持つ者をかき分ける。

中洲が近付き、三人の抱き合う幼い子供が見えた。長は胸を撫で下ろした。

「長さまっ長さまあっ」

馬から飛び降りた長に、三人は駆け寄った。

「説教は後です。貴方達の馬は？」

三人が泣きべそで指し示す方に、すぶ濡れになった三頭の草の馬が、半分泥に埋もれている。

「う…わあ……」

子供って何てやっかいな事をやらかしてくれるんだらう……。.

」沼地に馬を降ろしちゃ駄目って習いませんでしたか？

あ、今は、貴方達の身が先です。後発部隊を呼びましょう」

長は鬪牙の馬に術をかけ、空中高く舞い上がらせた。上空で馬は白く明滅する。

」さあ、後は救助を待ちましょう。こちらへいらっしやい」

屈んで三人を抱き寄せ、自分の雨衣を被せた。三人とも冷えきっているが、何とか動ける。

」何だってこんな日に、蟲の沼に来やうなんて思ったんですっ」

」こいつが…」

「お前だろ…」

「自分のする事に責任を持たない者は、蒼の里にはいない筈ですよ？」

二人は項垂れ、三人目が告白する。

」ボクが言い出したんです。友達を助けに行こうって」

「友達…？」

」中洲に友達がるの」

」水が増えて怖いって」

」だから助けに来たのに、見つからないの」

」友達なのに…？ 見つからないんですか…？」

」だって、逢った事ないんだもの…」

」……っ？」

」長さまお願い、友達を助けて！」

そんな無茶な。しかし三人の様子を見ると、嘘は言っていないそうだ。

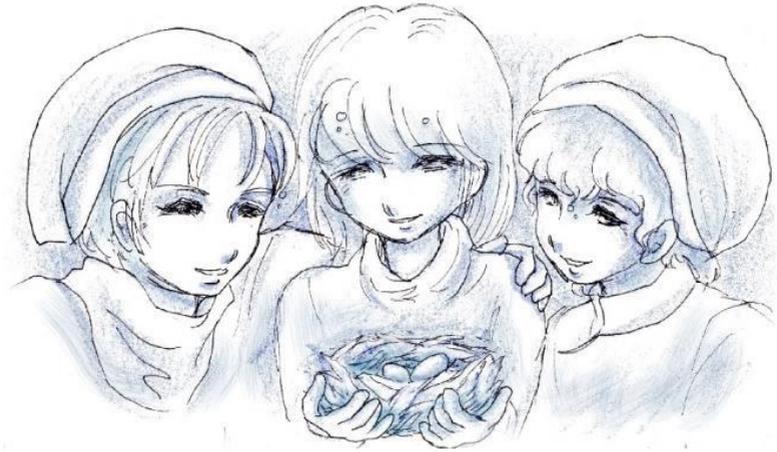
」では、こちらへ手を」

長の差し出された手の平に、三人の小さな手が重なる。

」友達のことを想って下さい」

長も、三つの意識を通して、集中した。

•••「ワイ…タスケテ…」



確かに一定のイメージが流れ込み、一つの場所を示した。長は立ち上がって、そちらへ歩く。

「…この辺りですが…?」

中洲の少し高い所に、藪があるばかりだ。

「あっ」

ひとつ雨衣の下に六本足で動いていた子供達が、足元に何かを見つけた。

「……これは…」

そこにはキビタキの巣があり、卵が二つ残っていた。親鳥は、増水で諦めたか、蟲に喰われたか…

「今晚中に水に沈んでいたでしょう」

長は巢ごと持ち上げて子供達に渡した。三人は、大事に懐に仕舞いながら、順番に暖めて孵す相談をしている。

卵の内の者の声を聞いていたのか…、まったく子供供って……。

「長さま、あの…」

「はいはい、今度は何ですか?」

「修練所の講義で習ったのですが、蟲って…」

「はい? 蟲って?」

「点滅する光に寄って来るんじゃないかったですか?」

「……!!」

この蟲は、このまま死んで、堆積して石になる。これにより、下流の森や集落は、急な増水の被害を免れるだろう。

「ミルワームの増殖は、これを予見していたのでしょっか？」
長はオタネ婆さんに尋ねた。

「奴等は何も考えとりませぬ。在るのは、何らかの力…、それだけですじゃ。下流の者達は、まだ滅ぶべきでなかったという事…」

「蟲を切り刻んでいたら……」

「長様、わしら小さい者は、その場その場で、精一杯生きようとするだけなのですじゃ」

長は雨に打たれながら、一匹、また一匹と、折り重なる蟲を見つめていた。

蒼の長が丸机に突っ伏している。

「どうされたのですか？」

寢床のカタカゴが、首を傾けて訊ねる。

「昨日の、己のドジッ振りに、落ち込んでいます…」

「そうなんですか？ オタネお婆さんのお話では、三人の子供も草の馬も、長様の素早い行動があったからこそ助かった」

「それは結果です。たまたまです。もっと的確な方法があった

筈なんです。前の長なら、もっと完璧な判断が出来ていたでしように……」

「……………」

オタネ婆さんは、薬師の所で、わざとゆっくり四方山話などして、時間を潰していた。先程、今日の用件を済ませて帰還した長が、パオに向かうのを見たからだ。

子供の頃から長を知っている婆さんも、長があんなにストリートに愚痴や弱音を溢こぼすのを、見た事がない。

一族と無関係だという理由だけではなからう。カタカゴの君には、何か、側に居る者を無防備にさせる空気がある。

あの長は、偉大な先代のプレッシャーからか、幼い時から自分に厳しかった。誰にも弱味を見せない。あれでは、いつか疲れて折れてしまうのでは…と、案じていた。

だから、あの娘と話している時の長のほとけけた表情を見ると、こちらもほっとするのだった。

「出来れば持ち直して貰いたい物だが…」

日を追う毎に、枕から離れられなくなるあの娘の先行きを想うと、気持ちしが沈む。

「お腹のお子に障るので、あまり強い薬は使えないんですよね」

薬師は独り言のよつにほやきながら、慎重に瓶の薬を量って調合する。

「何にしても、毒の進行を少し遅らせるだけで…」

「前の長様は……」

カタカゴがぼつんと話し始めて、長は顔を上げた。

「本当に、完璧でいらしたのでしょうか？」

「…?!」

長はカタカゴに向き直る。

「ええ、あのヒトには、間違いがありませんでした。全てにおいてソツ無く抜け目無く」

「それは…さぞかし大変だったでしょうね」

「………」

「皆に完璧だと思われ、頼られるのでは、気を抜く暇がなくて」

長はちよっとムキになって反論した。

「いえ、あの方は、大変だなんて思わないですよ。豊富な見識と力量があつて、いつでも余裕たっぷりです。私は、いつも、そんな背中を見ていましたから。子供の時から…」

「………」

カタカゴは黙ってしまいました。少し間が悪くなる。

「すみません… 私、よく知りもしないのに…」

「あ、いえ…」

「でも私は…」

カタカゴは言葉を選びながら、ゆっくり言う。

「迷ったり落ち込んだりなさる長様の方が、好きですわ」

「え……?!」

長は余程言われつけない言葉を見たのか、豆鉄砲を喰らった顔になって、目をぱちくりさせている。

言葉の選び方をしくじったか…と、カタカゴは慌てて言い直した。

「完璧で間違いのない人には、怖くて着いて行けません。私が下の者だったら、迷い、悩んで、失敗しては反省する、長様に着いて行きたいです」

「………」

長は言葉という物を忘れたように、茫然と、黒髪の娘を見つめていた。

風が少し強い……

丈の高い草がうねる中に、ハイマツと苔が覆う小さな丘があり、その天辺に、あの日自分の人生を変えてくれた女性(ヒト)

が眠る。

大きな馬から助け降ろしたのは、彼女が命がけてこの世に送り出した少女。母に近い年になり、やっと初めて母の名を知り、今日こうして墓に訪れる事が出来た。

「小さなお墓ですね……」

玉石がふたつ積まれただけの、言われなければ分からないような墓を撫でながら、少女は呟いた。

母と同じ真っ黒い髪が、風に波打つ。

「こちらへ……来てくらんなさい」

蒼の長が丘の反対側で少女を呼んだ。

「……わあっ……!!」

「少し季節を外してしまいました……、まだ残っていますね」

丘の反対斜面は一面のカタカゴの群落だった。

「雪の溶ける頃、この辺りで一番に咲くんですよ」

一族を離れた妹が、自分を頼って寄越した娘が、凶らずも自分を救ってくれた。

ヒトの縁えにしとは不思議な物。

今現在、里では長に着いて修行する若者が何人かいて、その中の有望株は、あの日の中洲の三人だ。



遭難の翌日、三人伴って、弟子入り志願して来た。

キビタキの巢を見つげ出した時の長を見て『カッコイイ』と思ったのが動機らしい。

その時はあしろつつもりで、キビタキの卵を孵したらね、と答えたのだが、何とあんなに冷えきっていた卵を見事に孵化させた。

ピイピイ言う雛を眺めながら思索に暮れている長に、血に關係なくやりたい事を伸ばしてあげればいいじゃありませんかと、後押ししてくれたのもカタカゴだった。

蒼の里の者からは決して出ない意見。
勿論、反対はあった。

「あの子達の血では、修行する価値があるかどうか。それより、それ以前にやるべき基本の勉強が山積みです。まあ、長様がそう決められるのなら、仕方がありませんが」

気が進まない風の若い教官に、長は書き物机から顔を上げて、シレッと言った。

「そうですね。貴方の言う通りです」

「え？ はあ……？」

「私が間違っているかもしれませんが。しかし子供達の未来を、

『仕方がない』で済ませてはいけません。子供達どのようなカリキュラムを組めば実現に近付けるか、話し合ってください。

その上で、彼等に可能かどうか、判断して下さい。貴方が」

「え？ そんな、私には……」

「修士時代はオタネさんの秘蔵っ子だったと聞き及びます。期待していますよ」

そんな感じで、責任を少しずつ分散させたら、自分なりの長の仕事が見えて来た。

三人の子供は寝食惜しんで『やるべき基本』をクリアし、七年掛かる修練所を四年で卒業して、無事弟子入りして来た。

それぞれ出来る事には差があるが、得意分野を極める方針で修行している。

お陰で去年辺りから、長はかなり楽になった。

「もう、あまり、逢えなくなるんでしょっ……」

黒髪が顔を隠して表情の分からない少女が言った。

母に似て本当にするどい。こうして共に過ごすのは今日までにしよう……と思っていた。

「貴方は、もう、寂しい子供ではありません。これから成長して、大人になって、恋をして、素晴らしい人生を送るんですよ。」

今までのように見護る必要は、もうないんです。この先、貴方が本当に困った時は、必ず助けに行きますから。・・必ず・・行きますから。・・・・・」

でも、困らない時は…、なるべく関わらない方がいいのだ…
そういうものなのだ。・・・・・

「さあ、今宵は一番の天の川が見られる星回りです。貴方には非見せてあげたかったですよ。行きましよう…」

空色の乗馬ズボンの少女は、長に助けられて馬に乗る。本当は一人でも乗れるのだが、一生の内、今くらい甘えてみてほしいだろう…じ。

二人を乗せた馬は、雲の上に現れ始めた星々に向けて飛び立つ。

〜おしま〜

二〇〇九・七・二九

